MfG_J_artists_related_to_Settaya

摂田屋ゆかりの画家、アーティスト

１．　川上四郎
（1）画家の生涯
（2）東口のシンボルロード　学問のみち
（3）川上四朗の作品
旧制長岡中学時代の油彩画
日常の生活風景画
装飾的な絵画
童画

２．星六さんと中川一政
（1）画家 の生涯
（2）中川一政の作品
箱根、真鶴などの風景画
書

３．平澤熊一とサフラン酒の縁、代表作の「南苑」
「南苑」　～　数少ない大画面の絵
平澤熊一 MySkip 記事
絵はがきで遊んでみました
年譜

４．松岡譲
一時期、摂田屋に住んでいた

５．秋山孝さん
摂田屋というより、宮内ですが、秋山孝ポスターミュージアムで

川上四郎の童画から着想を得たとされる、長岡駅東口シンボルロードの「学問のみち」という言い方については、関連のウェブページ投稿を、そのまま掲載させてもらいました。
中川一政画伯の画業と書については、ポーラ美術館名作選・絵画(2008)の解説を参考にさせてもらいました。
平澤熊一の画業については、新潟県見附市のみつけ市民ギャラリーの展覧会資料(2019)、長岡の情報誌MySkipを参考にさせてもらいました。

１．　川上四郎

(1) 画家の生涯

川上 四郎（1889年11月－ 摂田屋生まれ、美校卒の童画画家
1983年12月、新潟県南魚沼郡の自宅で死去、享年94。
東京美術学校西洋画科本科で藤島武二に学ぶ。大正2年同科を卒業後、
独協中学に奉職したが、同5年、コドモ社に入って童画家となり、同社の雑誌
「童話」を舞台として活躍した。
童画の芸術的地位を高めるため、童画という名称を作り、日本童画家協会を
結成、のち、日本童画会々員となる。
講談社絵本童謡画集『アリババ』『アラジン』、小学館幼年文庫『良寛さま』ほ
か、多くの児童書に挿絵を描き、昭和12年、野間挿絵奨励賞を受賞する。
精神性の強い牧歌的な農村風風物に定評があった。

川上 四郎（かわかみ しろう、1889年11月16日 － 1983年12月30日）は童画画家。
1889年、新潟県古志郡上組村大字摂田屋（現長岡市摂田屋）の豪農であった
川上半四郎（通称「川半」）の四男として生まれる。
兄の川上漸は医師で慶應義塾大学医学部教授（病理学）を務めた。
新潟県立長岡中学校を経て、1913年東京美術学校西洋画科卒業。
静岡県立榛原中学校で美術教師を務める。1916年コドモ社に入社。
コドモ社が創刊した雑誌「童話」に挿絵を描いた。以後各種の雑誌に表紙画や
挿画を描いている。晩年は新潟県湯沢町に在住し、1983年に逝去した。
出　典：Wiki

日本における児童向けの雑誌は、明治後期に誕生し、その中から生まれた絵を
中心とする絵雑誌は第一次世界大戦時の好景気と大正デモクラシーの自由な
雰囲気に支えられ、花開きました。

画家の川上四朗や武井武雄らはこれらの子どものために描かれた絵画を
「童画」と名づけ、「童画」は絵雑誌の中で、文章に添えられた挿絵としての立場
から、独立した芸術として発展していきました。
しかし、昭和期に入り、日中戦争、第二次世界大戦による物資不足もあいまって、
次第に絵雑誌は統合され、衰退していきます。
代表的な童画家としては、川上四朗のほか、武井武雄、竹久夢二ら。

(2) 東口のシンボルロード　学問のみち

http://www.pref.niigata.lg.jp/nagaoka_kikaku/1204737354314.html
越後長岡百景の「26 シンボルロード（長岡）」を紹介します
2011/3/31
長岡　駅裏のシンポルロードに、絵をモチーフにした七体の彫刻。
道は゜歩行者道専用道（JR長岡駅東口～中央図書館）の
長さ670メートルで、昭和63年（1988年）に竣工した。

バス通り東側
「笛吹く少女」1993
長岡美術協会々員　元井
達夫

元井さんは長岡高校の
昭和30年卒

東口シンボルロード　学問のみち

シンボルロードは、廃線となった栃尾鉄道の跡地を利用して作られたものです。長岡駅東口から市民文化公園へ続く遊歩道で、近くには、多くの小中学校や高校があり、地域住民はもちろんのこと、多くの児童・生徒・学生が利用することから「学問の道」とも言えるでしょう。また、川上四郎の挿絵をモチーフにした像や、童謡のレリーフなど、幼い頃のメルヘンの世界を思い出しながら、心の安らぎを感じられる場所でもあります。（長岡市在住 60代 男性）

※ 内容は平成16年の応募当時のものです。

百景の想いや場所にまつわる短歌（越後長岡百歌）

遠き日の想い出を誘う栃鉄跡いま甦り学問の路に

子が通ひ主人が通ひ孫通ふ栃鉄跡なる学問の道

※ 内容は平成17年の応募当時のものです。

関連情報

長岡シンボルロード（駅東歩行者専用道）

長岡シンボルロードは、「長岡市の顔」にふさわしい遊歩道を造ろうと、中心市街地活性化計画の一環として整備されました。長岡シンボルロード駅東歩行者専用道（JR長岡駅東口～中央図書館）は、長さ670メートルで、昭和63年（1988年）に竣工しました。駅東歩行者専用道は、昭和48年までこの場所を走っていたトッテツ（越後交通栃尾線の長岡―悠久山間）の廃線敷を使って、地元の人たちの参加と協力を得て整備されました。平成元年には、そのことが評価され、建設省（現在の国土交通省）の「手づくり郷土（ふるさと）賞」を受賞しています。

国土交通省の手づくり郷土賞「いこいとふれあいの道三十選」

基本構想は「出会い川上四郎の風景」

No.	題　　名	制作年度	作　　者
①	笛吹く少女	1993	元井達夫
②	春がきた	1993	堀田　正
③	木の葉の旅－II	1991	川辺正作
④	木の葉の旅－III	1993	内山良男
⑤	木の葉の旅－I	1991	堀田　正
⑥	あひるさんと散歩	1993	松本保忠
⑦	かえるの船頭さん	1993	鷲尾　正

長岡市シンボルロード野外彫刻紹介パンフレットより

(3) 川上四朗の作品

長岡高等学校記念資料館の
絵画
Nagaoka High-School

タイトル　一本橋
"Long bridge"
彼の長岡中学在籍時の絵

生家の近くの太田川土手から
川と東の山並みを描くいている。
スケッチの現場と思われる位置
からみた写真のように、金倉山の
スカイラインが描かれている。

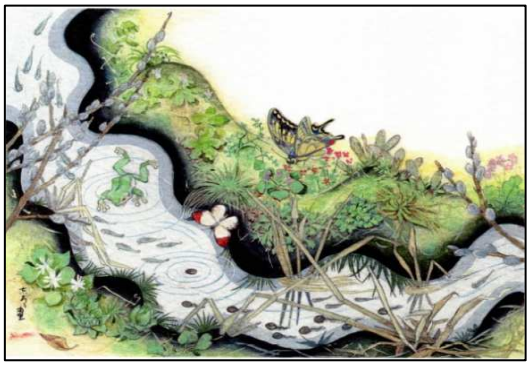
Settaya Scene in
his birthplace.
Ohta-Gawa River
in close-up view
and Kanakura^Yama
in Yamakoshi
in distant view.

タイトル　一本橋

KAWAKAMI Shirou (1889-1983)
This painting is a work of KAWAKAMI Shirou, whose birthplace was near here. He drew this painting from the causeway around here in his highschool days.
I think you can easily identify this mountain in the painting.
He is known as one of the pioneers establishing new category for children drawing. The category of the children drawing to that of ordinary drawing is thought similar to the relationship between children song (nursery rhyme) and popular song.
This painting is displayed in the museum of the Nagaoka High school, where he went to.

"Croft of backyard" in the Adachi Museum　　Typical children's drawing

The left is his typical drawing of "fairy pictures". This is a possesion of the Adachi Museum, Shimane. one of the best known in Japanese Art collection.He had established a new picture world, fairy pictures. Fairy pictires versus normal pictures, equivalent to novels versus fairy stories.



五合庵の絵
ほのぼのした風景画であるが、
非常に写実的である。
(新潟県燕市国上にある、小庵。
良寛様も一時期住んだことで
知られる。)

小川に蝶々の絵である。
装飾的な絵画であるが、蝶などの
昆虫はリアルに描かれており、

His another field of specialty, animal and plant art.
He studied under FUJISHIMA Takeji.

裏の畑 年代不詳　45.5×53.0 cm
足立美術館所蔵
大人たちが農作業をしている畑の脇道を、元気いっぱいに走り回る子ども
たちの姿。うしろでその様子を眺めているのは子どもたちの父親か。
ある秋の日常の一場面が細部まで描かれ、懐かしさを感じる作品である。

2. 星六さんと中川一政

星六さんの看板「星六」と「味噌」の字は、店主一家と縁のあった中川一政の書。
散策の途中で、一政画伯の書を拝見できるのは、すばらしいことだと思います。
(以下の記載については、ポーラ美術館名作選・絵画(2008)の解説を参考にしました。)

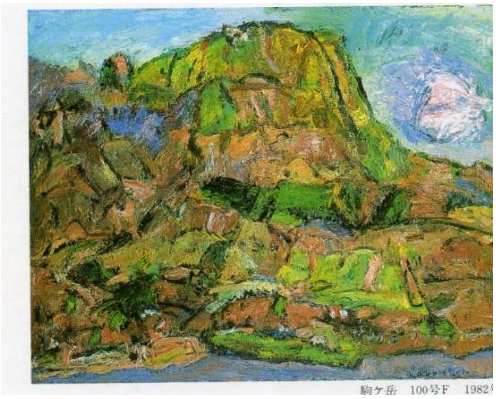
(1) 画家 の生涯　1893年(明治26)ー1991年(平成3)

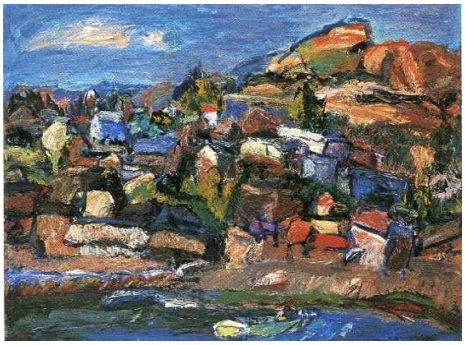
中川一政は、21歳のときにはじめて措いた油絵を1914年の巽画会(たつみがかい)第14回展に出品、審査員の岸田劉生に認められた。翌年岸田らとともに草土社を結成、日本的フォーヴィスムから独自の画境を求めて突き進んだ。
「私は生まれて、丁度よい時にゴッホとセザンヌを知ったのである。学校へゆかなくてもわれわれのように措いてゆけばよいと云うことを教えてくれたのである」と述べているように、中川にとって画境の源となったのは、文芸雑誌『白樺』(1910年創刊)によって紹介されたゴッホとセザンヌであった。
以後、自然を師と仰ぎ、自然との格闘こそが画の道とする中川一政の画業がはじまった。戦時中は伊豆に疎開しその途中、真鶴に魅了された。
バラを題材にした作品は判明しているだけで800点を超えるという。
中川は油絵だけでなく、書の作品も数多く残しており、書家としても人気が高い。
　一政は、小杉末醒(放庵)や石井鶴三らと漢学者公田連太郎を囲む「老荘会」をつくり、漢学や墨蹟に親しんでいた。彼の書からは確かな骨法と高い精神性が感じられ、書も人気が高い。1975年 文化勲章を受章。文化功労者表彰。

At the age of 21, Nakagawa drew his first oil painting, which Kishida Ryusei, one of leading painters of the time, recognized Nakagawa's talent.
Since that time, he had pursued his own mood of paintings.
　The fundamental sources for Nakagawa's painting style were Van Gogh and Cezanne, who were introduced to Japan by the literary magazine Shirakaba (founded in 1910). In his own words, he came to know these two artists at just the right time, as they taught him that he did not have to attend art school, but could follow their styles of painting instead.
Thereafter, Nakagawa looked to nature as his teacher and believed that grappling with nature first－hand was a way for a painter to progress.
　Besides drawings, he produces many calligraphy works, making it a popular calligrapher. Nakagawa joined with Kosugi Misei (Hoan) and Ishii Tsuruzo to form the Rosokai, a group that aimed to study Chinese classics and calligraphy under the guidance of the Sinologist, Koda Rentaro.
Nakagawa's own calligraphy manifests an assured composition and strong spirituality. He received a medal called the "Order of Cultural Merit" in 1975, one of the highest honors as a cultural person in Japan.

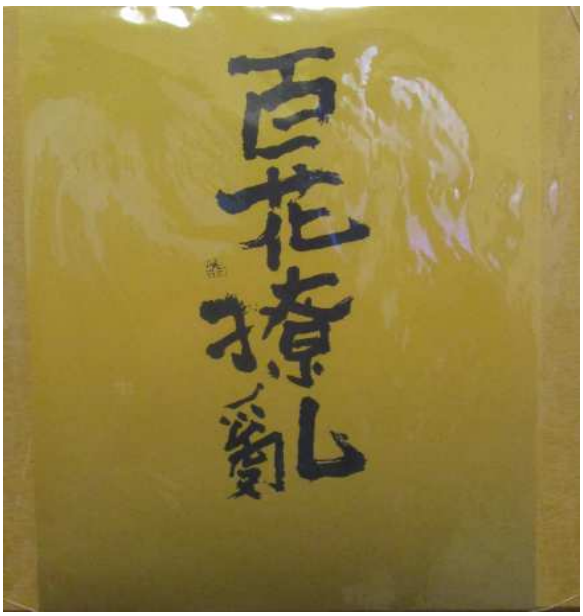
（2） 中川一政の作品

2021年、富山美術館で「画壇の三筆」というタイトルの企画展がありました。
画家は熊谷守一、高村光太郎、そして中川一政です。
下にはネットで見つけた書を掲げましたが、会場でも、この字のような強い文字が並んでいました。





富山県水墨美術館の中川一政さんらの書の企画展で、
ミュージアムショップで購入した絵葉書をもとにして、ちょっと遊んでみました。「百花撩乱」です。 繚乱でなくて、撩乱。



掛け軸にしました。

3. 平澤熊一とサフラン酒の縁、代表作の「南苑」

熊一は1908（明治41）年、新潟県古志郡上組村大字摂田屋（現・長岡市）生まれ。1927（昭和2）年、工学院建築科を卒業。1928（昭和3）年、川端画学校洋画科で学ぶ。1940（昭和15）年、美術文化第1回展（東京府）に「夢」「岩」が入選。1943（昭和18）年、第4回美術文化展で「故宮ノ花」「南苑」「白閑鳥」が奨励賞受賞。1954（昭和29）年、第18回自由美術展で「夏休みと少年」が佳作賞受賞。1955（昭和30）年、自由美術協会会員となる。1989年12月4日逝去。享年81。

東京池袋から長岡疎開時代
北京から帰国後結婚し阿佐ケ谷に新居を構えそこで長女が生まれる。後1943年東京豊島区池袋の要町(アトリエ村)にアトリエ付き長屋を借りる(長男誕生)。この頃の作品の多くは紛失してしまったが、2015年に見附市公民館にて120号の大作『南苑』(1943　F120)が発見された。この作品は美術文化協会主催の第4回美術文化展に出展され、奨励賞を受賞した作品であり、この時代の作品としては小品を除けば現存する唯一の作品となる。この時代多くの画家がシュールリアリズム表現の傾向が強く平澤も同じくその傾向の作品を手掛けていた。
1945年の4月、池袋から郷里の新潟県長岡市に疎開している(1978年次男誕生)。そのころの作品は大作はなく公募展もなかったようである。作品は小さいながらも穏やかな作品が多いが、ジャンル的にはさまざまな作品を手掛けている。(1940年9月29日の日記から：自分は近ごろ花だけを描いている。花だけに感激を求めているのだ。小さい花にも感激できる心を持ちたいものだ。ここから出直しではなかろうか)

以下、春日
平澤熊一は、父親、そして兄が大工で、サフラン酒 の離れを作るほどの家に生まれながら、たまたま家業 の建築を学ぶ途中で絵への情熱捨てがたく、勘当され ても絵描きを続けました。 熊一とサフラン酒と、こんな縁のつながりがあるなんて、 知りませんでした。
貧乏に苦労し、栃木にアトリエ付きの一軒家を贖うために、 自身の代表作とも云うべき大作「南苑」を手放すことにし、 たまたま長岡の町が空襲で長岡の商家に余裕がない時、 隣り町見附の織物協同組合が買い取ってくれ、最終的に 見附市の所蔵美術品として、今日に至り、私らが、この 大作を見ることができる。 これも、ひとつのドラマです。
見附からのゲストには、 ぜひお話したいストーリーです。

平澤熊一　年譜　　1908(明治41)年～1989(平成元)年
https://www.gallery-mitsuke.com/exhibition/11880/

1908年（明治41）現在の長岡市摂田屋に生まれる。
1927年（昭和2）建築士を志して入学した工手学校（現在の工学院大学）を卒業するが、在学中に絵画に興味を抱き川端画学校で洋画を学ぶ。
1933年（昭和8）台湾に渡り、4年間滞在して制作に専念し、1936年には同地で個展を開催した。
1937年（昭和12）帰国。東京・豊島区に住み、麻生三郎、井上長三郎ら新人画会のメンバーと交流する。
1938年（昭和13）中国北京に写生旅行。第8回独立美術協会展に《月と貝》が初入選する。
1940年（昭和15）東京・阿佐ヶ谷に移る。第1回美術文化協会展に入選。
1943年（昭和18）第4回美術文化協会展に《南苑》などを出品し、奨励賞。
1944年（昭和19）東京・池袋付近に広がっていたアトリエ長屋の1つすずめが丘（要町1-13）に移る。
1945年（昭和20）空襲を避け5月頃、長岡に疎開する。
1950年（昭和25）妻の実家のある宇都宮に移り、市内一の沢2に自身設計のしたアトリエ付住宅を建設。ここで絵画研究所を主宰し生徒を指導。
1951年（昭和26）この年の第15回展から自由美術協会展に出品を始める。以後、1981年の第45回展までほぼ毎年出品を続ける。
1955年（昭和30）第17回自由美術協会展に出品、自由美術協会会員になる。
1971年（昭和46）画集『平澤熊一画集 台湾1933－1937』を刊行。
1973年（昭和48）「栃木県内美術の現況展」（栃木県立美術館）に出品。
1977年（昭和52）「栃木県美術の現況展」（栃木県立美術館）に出品。
1984年（昭和59）「栃木県美術の現在 絵画／映像／彫刻」（栃木県立美術館）出品。
1989年（平成元）12月４日死去。享年81歳。

1990年（平成2）「鬼の業 平澤熊一遺作展」（宇都宮市文化会館）開催。
2012年（平成24）練馬区立美術館で特集展示「平澤熊一展―うちのめされた時がほんとうに人生をしっかり生きるとき」開催される。
2015年（平成27）栃木県立美術館で企画展「昭和を生きた画家 平澤熊一展」。
2018年（平成30）みつけ市民ギャラリー(ギャラリーみつけ)展示室2にて「見附市所蔵《南苑》公開」が開催される。
2019年（令和元）　みつけ市民ギャラリー（ギャラリーみつけ）2階フロアにて、「没後30年平澤熊一・若井宣雄展」開催される。

平澤熊一 MySkip記事

平澤熊一

長岡への思い・望郷の念

昨年（2018年）6月号の当欄で、長岡・摂田屋出身の画家平澤熊一（1908－1989）について書きました。熊一の作品は新潟県立近代美術館に5点収蔵され見附市にも120号の油彩大作「南苑」の所蔵がありますが、その画家の名前は長岡であまり知られていません。それには「画家としての活動は、戦争で長岡に疎開した1945（昭和20）年～1950（昭和25）年の五年間を除けば、大半は台湾や東京、42歳から亡くなるまでの栃木でおこなわれた」という理由が推察されます。しかしその一方、故郷である長岡や近縁地域との深い交流が続いていたことも明らかになってきました。

長岡との接点をわずかな期間と捉えるのではなく、克明に遺されていた熊一の日記などの史料をつぶさにあたると、同時代を長岡で画家として生きていた若井宣雄、本間正三らとの交流、晩年になるにつれ深い望郷の念があったことなど、長岡への深い思いを読み取れたのです。

私は見附市所蔵でみつけ市民ギャラリー保管中の熊一の大作「南苑（なんえん）」が発見された時から調査に携わり、前回の本紙記事において、その「南苑」がなぜ見附市にきたのか等にも触れながら、熊一の生涯を俯瞰的に紹介しましたが、本稿ではそれ以降の調査を中心に綴りたいと思います。

いたものの、全国的には近年再評価されていて、首都圏の美術館を中心に作品展示が相次いでいます。池袋モンパルナス関連の画家として2012（平成24）年に練馬区立美術館で「平沢熊一展　うちのめされた時がほんとうに人生をしっかり生きるとき」が開催され、2015（平成27）年には栃木県立美術館で「昭和を生きた画家　平澤熊一展」と大規模な企画展がおこなわれています。ほか関東の公立美術館でも作品収蔵に向けた動きが出ており、みつけ市民ギャラリーでも今年9月の企画展で、同時代を生きた若井宣雄とともに「昭和を生きた（描き続けた）画家」として取り上げることになっています。

その企画展の準備の一環もあり、調査では県外の美術館と連絡をとっています。今年4月には栃木県宇都宮市を訪ね、栃木県立美術館を訪れ関係者とともに熊一の家族宅を訪問し作品調査と情報交換を行ってきました。

熊一が生前最後に使っていた栃木のアトリエはすでに解体されていますが、除却前の2010年に栃木県立美術館が調査に入っており、貴重な記録が存在しています。栃木県立美術館杉村学芸員および他館学芸員との意見交換で、画家修業の台湾時代の困難はありながらも描くことへの情熱や池袋モンパルス関連の作家との交流についてなど様々なことを話し合いました。

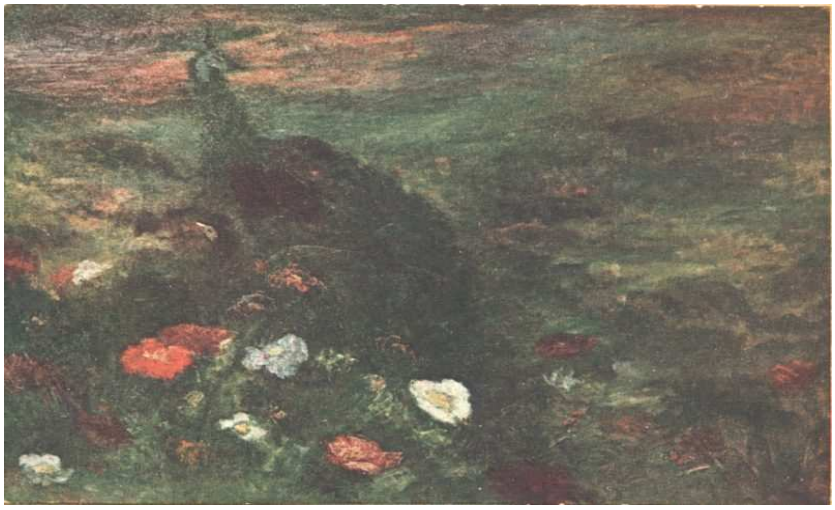
現在の美術界で、戦前から戦後の近代日本絵画が見直され始めている傾向を感じ、その中で熊一の作品はあらためて注目されています。この長岡生まれの画家をもっと多くのひとに知ってもらいたいと思っています。

た建物や庭園を作り続けます。豪奢な鏝絵の蔵が有名ですが、1911（昭和6）年建築の離れ屋敷も座敷一つ一つに当時最高の材料と意匠を施しました。屋久杉の天井や螺鈿の壁、和洋折衷した斬新な床の間など細部まで突き詰めた造りで、棟梁として関わった熊一の父と兄の苦心と誇らしさを感じる建物です。また、仁太郎設計の庭園も独創的で、この迫力ある異次元的な空間はルネサンス後期のマニエリスムに通じるものを感じました。

このサフラン酒本舗で現当主の吉澤義孝氏、NPO法人「醸造の町摂田屋町おこしの会」平沢政明氏から、熊一の実家平澤大工の住まいの場所や、画題として好んだ太田川についての情報を得ました。宮内駅前から近い秋山孝ポスター美術館職員の森山さんからは摂田屋の資料や情報提供がありました。この2件の訪問から熊一の実家の場所や知人宅、疎開中に間借りをしていたと思われる場所が判明しました。

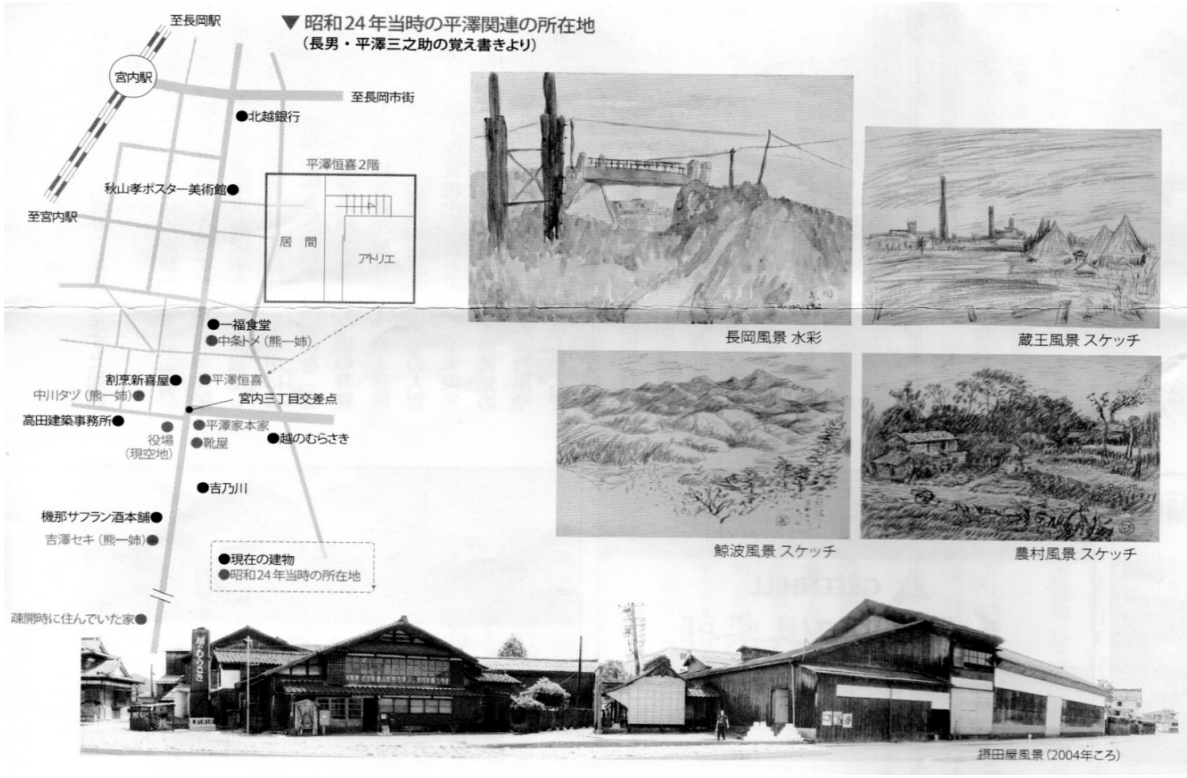
熊一が好んで描いた故郷は実家を中心に歩いて行ける範囲が多いのです。幼い頃の自分の小さな宇宙が晩年まで大きな宇宙のように広がり繰り返し描かれていったこと、それは幸せな記憶を留める行為だったのかもしれません。

1945（昭和20）年から1950（昭和25）年の長岡疎開中は、実家と交流は持ちながらも間借りし家族を養い画業に熱心に取り組みました。30歳代後半～40歳代前半のころです。自分の作品以外にも肖像画などを多く手がけ村の初級中学校（現在の長岡市立宮内中学校）で美術の講師をしました。家族に腹いっぱい食べさせたい・絵をもっと描きたい・自分の家がほしいなど、日記からは鬱屈した気持ちや生活に追われる様子が感じられます。



《南苑》1943
カンヴァス・油彩
130×194cm
見附市蔵

平澤熊一の生家は、新喜屋さんの向い



4. 松岡譲

文豪松岡譲を取り上げて、「意外」と思われる方も多いと思います。
私も個人的に、歴史学的小説といわれる「敦煌物語」が好きですが、画家
としても、悠久山の郷土資料館に、文豪松岡譲の絵画が、画材セットと
ともら展示されています。 文豪の余暇とは言えない、いい絵です。

ここ摂田屋、宮内の文学と云えば、松岡譲であり、長岡は堀口大學が
少年時代から旧制長岡中学卒業までを過ごした地です。
松岡譲と堀口大學は、旧制長岡中学時代、同級生だったそうです。
松岡譲は、摂田屋から南東、3．5キロの石坂(村松)にある本覚寺に生まれ、
旧制中学卒業まで長岡で育ちました。
また先の大戦の末期に長岡へ疎開、以後亡くなるまで、長岡で過ごしました。
疎開生活の最初は 宮内摂田屋の梶山神社近くに住まいし、宮内原信近く
の交差点から沢田跨線橋東詰に流れる小川で、魚釣りを良くしていたとの
ことです。その後、蒼紫神社近くに移り、さらに悠久山公園内に引っ越した
とされています。
松岡譲は、校歌の作詞も手掛け、摂田屋学区である宮内中学校の校歌も
作詞しています。 ちなみに上組小学校の効校歌の作詞は、堀口大學。
堀口大學は少年のころ、夏休みは昆虫採集に一生懸命だったようで、町なか
の住まいから栖吉まで、虫取り網を持って歩いたそうです。また雪国の生活
の辛さも知り、彼の詩作から、雪国に生きる人々への想いが読み取れます。

松岡譲の碑は、悠久山公園内の、長岡市郷土資料館に向かう坂道の
途中ににあります。
石碑は、’堀口大學による、松岡譲の早い死を悼んた詩です。

松岡譲 (1891-1969) 69才で死去。
19(1944) 郷里の長岡市郊外の宮内町に疎開。53-55才。
20(1945) 東京の漱石山房が空襲で全焼。
26(1951) 悠久山蒼柴神社の社務所に転居。
38(1963) 御山町に転居、終の棲家となる。

5. 秋山孝さん

秋山孝（1952年5月-2022年1月18日）
摂田屋生まれ。
イラストレーター・グラフィックデザイナー・イラストレーション学研究家。
多摩美術大学教授。秋山孝ポスター美術館長岡館長を務めた。

2022年1月18日、若くして急逝。
私自身は、秋山孝ポスター美術館長岡の開館行事で、遠くから拝謁
しただけだったが、もっとお話を聞きたかった。
2023年のミライ発酵本舗の総会で、追悼記念誌が希望者に配布された。
後日、業績をまとめたい。